

仏印での情報班員父は中国で獄死

新潟県 稲積 三郎

―本籍は新潟県ですか、戦地はどこへ行かれたのですか。

私は中国の天津市生まれです。父が早くから中国へ渡って、天津で一家で商売をしていました。ですからそだったのも天津です。

大正十年十月十二日生まれですから、昭和十六年徴集で、十七年の十二月に本籍地の富山の第三十五連隊留守隊へ入営しまして、一週間後に舞鶴出帆で仏領印度支那(ベトナム)のサイゴンに上陸、第二十一師団(討兵団)歩兵第三十五連隊に入りました。

サイゴンで一週間、ブノンペンで一期の検閲を受けたのですが、その間私的制裁はなかったです(第二十一師団では、私的制裁がやかましく禁じられていた)。教育は重機関銃でしたが、十八年春には連隊本部で、当番兵と

して勤務しました。本部はサイゴンにありましたが、サイゴンは気候もよいし、おいしい物もありました。

当時はフランス総督府があり、地元の安南人はきわめて親目的で「オンニヤット、ニヤットバン」といって日本人は尊敬されていました。日本がフランスから解放したのですから。だから、戦後現地に残った人もずいぶんいました。

―仏印には華僑がたくさんいて、その実力は大了ものだったのでしょうが、稲積さんは中国生まれ中国そだちだから、中国語は達者だったでしょう。

私は中国語が話せるので師団司令部の情報班に勤務して、私服で中国の情報を取ったり整理をしていました。その後ラオカイ情報班(昭和会社という名称)へ行った。班長は菊地大尉、副の横田准尉のもとで仕事をしたのですが、そこには曹長から一等兵まで十五人ぐらい、私はその時は上等兵でした。

私は厩当番をして、寝ていた時に放馬(馬が厩舎から逃げ出す)したので、編上靴でなぐられて顔が穴だらけになった。そのため一選抜の上等兵になれなかった。そ

んなわけで私は終戦まで情報収集の仕事をしたわけ
です。

そこには、投降した中国の雲南省の兵隊が七、八十人
いて、自由にさせていた。それでも逃げない。仏印の華
僑とは民族が違うためか、なじまないようだった。私は
投降兵の教育もやっていた。

昭和 Company というのは表向きは商社です。向うから水銀
とか錫とか阿片等を集め、替りは塩、それをどういふ
うにして運んだのか不明だが。そして、教育した雲南兵
を密偵（一種のスパイ）として中国領にいれる。彼等は
雲南の生活より、仏印の方がよいので逃げない。

— 明号作戦の時はどうだったのですか。

そのとき、私は軍司令部勤務だったので、作戦に参加
したが参戦はしていない。血だらけの人や、足のない人
が担架で運ばれてくる。戦争の悲惨さをこの目でみてい
ます。

明号作戦はフランス軍を武装解除する作戦で、仏印全
土にわたって一挙にやった。作戦の前は、私達の班には
フランス語関係と中国語関係があり、高等官待遇クラス

の人が二、三人いた。その人たちが、フランス側の情報
を持ってきたようだ。同じ室でも、情報の相互交換はし
ない。私の上の方の曹長とか中尉に報告し、それが参謀
の方へいったようだ。

— 明号作戦は二十年の三月から五月中旬までですが、
終戦のときはどうだったのですか。

終戦は、原子爆弾が落ちて負けたということが翌日わ
かりました。華僑（中国人）が、「原子弾（イワンスタン）
落ちたので日本は負けた」と言った。我々はすぐ司令部
集合となり、原隊復帰を命ぜられた。ベトコンにつかま
ると殺されるので、船を買ってむしろをかぶせて、ラオ
カイから河をくだった。約一日かかって司令部についた
のだが、その間の一日は不安だった。ベトコンが撃って
くる。「船をとめる」というが、とめたらやられるので、
そのままくだった。そのときはもう共産軍がはいって来
た。山のなかにいっぱいいいたので集まってすぐ出て来
た。

共産軍の服装は民服、わらじばきだった。兵器は主と
して小銃、手榴弾が軽機関銃ぐらいは持っていた。迫撃

砲などの砲はなかった。そのなかを、菊地大尉以下十五
〜六人でサイゴンへもどった。その当時、中国へ逃亡し
た者もいた。兵隊は下士官に、下士官は将校になれると
いわれていた。

―仏印は以前は、第二十一師団と独立混成旅団程度
だったが、二個師団ぐらいいって来て、相当の兵
力になっていましたか。

そうですね。私達の第三十八軍や第二十一師団はハノイ
に集結した。私等は原隊復帰なしで軍司令部で勤務しま
した。

そして、皮肉にも日本軍の武装解除を手伝った。中国
軍は鍋、釜をかついでわらじばき、すげ笠姿だったが、
四〜五日したら靴ばきになった。私は兵器庫から兵器
を、独立軍に渡してやったこともある（かげで兵器の売
買もあった）。

私は司令部において、中国語がわかるので、一緒に話を
したが、当時の中国の兵隊は、日本人を尊敬していたの
で、問題はなかった。中国に対し日本軍の階級章をはず
すと、統制が取れなくなるという、最後まで階級章を

つけておく交渉もした。私は軍司令部へいってからは軍
服を着なかつたが、船に乗って始めて軍服を着た。

―終戦後、帰るまでの状態はどうでしたか。

一般の人は大変だったと思います。中国の兵隊は日本
人の持っているものを欲しがった。だけど取ることも出
来ないので、私はイザゴザを起こさないよう、なかを取
りもっていた。

中国人は服装はまずしくとも、人間的には信頼しあえ
た。蒋介石の命令があつたので、軍紀は守られていた。

私はハノイから乗船して昭和二十一年四月舞鶴へ入港復
員しました。

―稻積さんは、天津生まれ、天津そだちで、お父さん
や一家は中国にいたわけだから、日本へ帰ってもず
いぶん困ったでしょう。

家は天津だったので親も皆中国でした。だが、中国へ
は帰れない。本籍が富山だったが富山は空襲で焼け野
原、人々は焼トタン屋根の下で住んでいる。伯父は本籍
にいたが、やはり焼けだされていた。

前にも申したとおり、父は天津で仕事、軍需工場を経

営していたので、戦犯として獄死した。二十三歳から六十歳ぐらいまで営々として働いた。昔から中国にいったので支那事変とは関係ない。同じ引揚げでも筋が違う。営々と築いたものは全部没収されてしまった。

継母が一人で父の遺骨を持って引揚げて着た。継母は商売も知らず軍隊へ行ったし、無一文だった私を、足手まといと思われたので別居をした。私はしばらく富山の伯父のところへ、約一か年ぐらい厄介になっていたが、随分苦労した。その後伯母のところ（富山の薬屋）で手伝いをして結婚、自立をして現在に至っている。

仏印での勤務、復員後の商売のことなど思い出すと、随分長いような短いような気がするが、ぬるま湯に浮かったような生活はいやだったので、積極的に進んだことが、私の今日を築いたわけです。

ボルネオ・パリックパパン

二十二特別根拠地隊

長崎県 松田正富

—松田さんは海軍だそうですが、志願だったのでか、勤務はどこだったのですか。

私は大正十四年八月生まれで、昭和十八年四月の志願で、佐世保相之浦海兵団に入団です。三か月後に大村航空隊へ入隊、十月頃に二十二特別根拠地隊へ転属しました。「特根」では水上飛行機の整備をし、最後まで整備兵でした。

昭和二十年のはじめに、パリックパパンに連合軍が上陸したので、油田の全部のバルブをあけて火をつけ、何日も燃えつづけていました。水上機の部隊だったが、内地から飛行機が飛んでこないのが一般の兵になった。

—ボルネオの兵力は少なかったもので、連合軍の上陸では相当苦しい戦いであったと聞きますが。